

1.C. フレーザー 著  
『図説 金枝篇』

(東京書籍) [163 F1]  
国語科

ローマから程近いその湖は、湖面に反射する月があまりに美しいので「ディアナの鏡」と呼ばれていた。そこには決して枝を折り取ってはならない聖なる木があり、森の王が祭司として女神ディアナに仕えている。王はかつての殺人者であり、常に剣を身に付けては自分を殺害しようとする者に怯えている。

今夜、一人の逃亡奴隷が聖なる木の枝をそとと折り取り、王を殺すだろう。奴隷は元の王に代わって王となるが、彼もまた次の王によって殺される運命にある。これは慣習なのだ。逃亡奴隷だけが「金枝」を折り取ることを許され、王と決闘して新たな王となる。王はその最後の使命として殺されなければならない。

なぜ逃亡奴隷が王となるのか。なぜ金枝を折り取らなければならないのか。なぜ王は殺されなければならないのか。こうした問題を説明するために著者

のフレーザーは世界中の伝承・伝説の中を駆け回り、壮大な推論を展開してゆくこととなる。本書はその一三巻に及ぶ大著をわずか一冊にまとめ、図版まで載せたものである。「金枝篇」は金枝に始まり金枝に終わる。しかし、その間に「呪術」「タブー」「死と再生」「生贄」などたくさん興味深いテーマに触れてゆく。これらは全て先程挙げたような疑問を考察するうえで導かれるものであり、その知的な世界の広がりには一見の価値がある。学問というものの奥深さについても教えてくれる一冊だろう。

星新一 著

『ポッコちゃん』

(新潮) [913 M31-1]

化学科

趣味が読書の人って何となくかっこいい。そんな人に憧れるが、国語の教科書程度の長文ですら読むと眠くなる、という人に勧めたい本を紹介します。ショートショートというジャンル

### 読書案内

ンルをご存じでしょうか。文庫本サイズの3〜5ページで一話が完結してしまう、びっくりするくらい短い小説です。一話読むのに5分あれば十分。飽き性な私でも適当にめくったページから読み進められ、せっかちな私でもすぐにオチまで辿り着き満足感を得られる。そんなわがままな気分の人に大変重宝する本です。

そのショートショートシリーズで最も有名と言っても過言ではないのが『ポッコちゃん』です。この『ポッコちゃん』の文庫本の中にも

たくさんのお話がありますが、お気軽に入りていか紹介します。最後の一文を読んだときにヒヤツと肝が冷える感覚を味わいたいなら「暑さ」、もし自分が起承転結について授業をするところがあるなら「宇宙通信」、故事成語の矛盾を彷彿させる内容だ星氏ならではのテーマ設定と、「なるほど!」と思わせるオチの「信用ある製品」など、本屋で5分だけ時間を潰したいときに丁度良いのでよかったです。読んでみてください。

星氏の作品は「世にも奇妙な物語」の脚本に起用されるなど、複数映像化されていますが、伏線が一つに繋がったときや、予想もしなかった展開がきたときのおもしろさは、やっぱり文字で読んだ時が一番ドキドキするなあ、と個人的に感じます。ぜひ読書が苦手という人のきっかけの一冊にどうぞ。

三浦綾子 著

『ひつじが丘』

(講談社文庫) [913 M38-2]  
養護

北国の女子高出身の奈緒実は親の反対を押し切って、同級生の兄と結婚します。彼女の父親は教会の牧師で、夫は会社勤めをしながら、絵を描いています。作品は全くと言っていいほど、世に認められていません。芸術家はわがままなんだ。芸術は命がけの激しい自己主張でもあるんだからな。こう言い放ち、家庭を全くかえりみず、まともな家具も揃えてくれない夫に、いつしか奈緒実は失望し、実家に

帰ります。そんな時、奈緒実を優しく迎えたつも「愛するとはゆるすことだ」と言った、父の言葉が彼女の胸に突き刺さります。人間の弱さと、ゆるすことの寛大さ、そこから見えてくるキリスト教の中の愛に触れることが出来る作品です。

私が三浦綾子の作品に出会ったのは高校生の時です。以来、彼女の作風の魅力に引き込まれ、何作も読みました。当時、通学中の電車の時間は、寝るか、小テスト等の勉強を切羽詰まてやっていたかのどちらかでした。それがいつの間にか、彼女の作品を読むことができる、お楽しみ時間に変わりました。

私は皆さんに読書を好きになることに留まらず、出来れば高校生の中に、好きな作家を見つけたいと思います。皆さんの忙殺を極める生活の中に、ほんのひと時、好きな作家の世界観に引き込まれる、そんな充実した時間があればな、と思います。気分転換に好きな音楽を聴く様に、好きな作品の好きな箇所を読む、そうして穏やかながらもハリのある日々を過ごしてもらえればと思います。

ルネ・デカルト 著  
『方法序説・情念論』

(中公文庫) [081-9  
11-9  
613-1]  
美術科

この本には、現実で人が関わる  
事実に対し、数学を使って考えて  
いく方法が述べられています。デ  
カルトは、現実の世界に向き合う  
にあたり、先例、習慣からくる思  
い込みを切り離し、場合分け、順  
序付け、関係付け、論理立てを出  
来る限り吟味して行うことにしま  
した。こうすることで、「確かだと  
判断できる事実が得られ、それだ  
けで世界を捉える、この方法を捉  
えられないこともあるけれど、そ  
れは自分では確かだと判断できな  
いから、考えることから捨てる」  
と、きつぱりしています。

彼が生きた十七世紀ヨーロッパ  
は混沌とした社会でした。旧教と  
新教の対立が三十年戦争(1618-16  
48)を、科学の発展と宗教的価値  
観の対立がガリレオの断罪を起し  
しています。また経済の中心が地  
中海世界から北方ヨーロッパへ移  
つてきています。宗教的にも経済  
的にも混乱し、価値観の揺らいで

いた時代でした。

揺らがないものへの探求に駆ら  
れ発見したのが、数学をあらゆる  
ことの基礎において考えることだ  
とデカルトは述べています。その  
伝える調子は、わたしには冷たず  
ぎず固過ぎず血の通つたものに感  
じられ、「そういう世界の捉え方が  
あるのか」と強く納得させられま  
す。

この本の表紙はフランス・ハル  
スが描いたデカルトの肖像画です。  
ハルスは、十七世紀オランダの肖  
像画家で、喜怒哀楽を見せる庶民  
を描いて有名です。ハルスがデカ  
ルトを描いていたとは、世の中う  
まく出来ていると思います。

国木田独歩 著

『武蔵野』

(新潮文庫) [913  
K11.2]  
英語科

仕事の合間に繰り返し親しん  
できた作品だ。往年の里山の風  
景が想像され、何とも落ち着い  
た気分になる。しかも茶店の婆

さんと筆者の軽妙な会話も織り  
込まれて微笑ましい。内容はそ  
んなところにしておいて、以下は朗読  
論めいたものになる。「武蔵野」  
を知ったのは、公共図書館で借  
りた朗読CDを聴いたのであ  
り、自分の目で紙の本を読んだ  
のではない。作者独歩はイギリ  
ス文学に親しんだ天折の作家  
だ。その所為か、英詩のような  
リズムが心地よい。無論、CD  
やレコードさえもない明治時  
代、20代後半の独歩は読者自身  
に文字から音韻を感じ取ってほ  
しいと思つたはずだろうし、今  
でもそれが正道と言える。それ  
でも、朗読で名作を聴くのは、  
重宝な娯楽である。目が要らな  
い読書は、満員電車、就寝時の  
枕元、散歩の耳友達と利用場面  
は多様で、しかも耳は目と違つ  
て疲れることは稀だ。目で見  
て通り過ぎるところでも、耳では  
意外と気になる。すると、紙の  
本に立ち戻つて該当箇所をしげ  
しげと眺めてみる。そんな本末  
転倒的読書も可能だ。欠点があ  
る。朗読音声は必ずしも読みた  
い作品を網羅してくれはしな  
い。されど、自分で気に入った  
作品を読んで、ホームページに

アップロードするご時世であ  
る。譜面を読むように、朗読が  
生まれる。情報技術が文学を音  
楽化するわけだ。響林せいじ、  
ご存じだろうか？これはヒトで  
はなく、実在する合成音声の名  
前だ。ほど無くして、原作と共  
に、読み人知らず音声がかぎに  
溢れかえるだろう。

山下正夫 著

『動物と西欧思想』

(中公新書)  
英語科

数ヶ月前、JR塚本駅からほ  
ど近いマンションのゴミ収集所  
から出てきたイタチと至近距離  
で目が合つてしまいました。ま  
た、私の家の近くでは20匹以  
上の野生の猿の群れが民家の屋  
根の上を移動する姿をよく見か  
けます。このように私たちの周  
りにはたくさん的小動物がある  
のですが、それらが自然死して  
いる姿を見かけることはあまり  
ありません。その理由は定かで  
はありませんが、死を人々の日  
常的な意識から遠ざける自然の

摂理ではないのかと考えていま  
す。こんなふうには動物と人間の  
思考、つまり動物のシンボリズム  
に昔から興味があります。

今回取り上げたこの本はヨー  
ロッパ社会における狩猟採集時  
代の鹿、ギリシャ・ローマの古  
典古代の羊、中世から近代に至  
るまでの牛と馬、近代以降の馬  
や機械のイメージと社会がどの  
ように重なり合つていくのかを  
詳細に分析しています。それぞ  
れの社会形態で身近であつたこ  
れらの動物が必ずしも肯定的な  
イメージを持つて尊重されるだ  
けでなく、例えば鹿や羊が悪魔  
や魔女といった負のイメージを  
持つ存在として考えられていた  
ことも併せて描かれています。そ  
れは犬や猫、牛や馬などの家畜  
に、身近で家族の一員のような  
イメージを持つと同時に、差別  
的な意味を付与してきたことと  
同じです。

同じ著者の『植物と哲学』、  
さらに生き物のシンボリズムを  
専門的に分析したレイヴィースト  
ロースの『野生の思考』[389 R1  
1] (表紙はまさに三色すみれ  
「pansae」です)にも挑戦して下  
さい。